

## (1. 書評論文)

1-2. 「非モテ」的リアリティへの社会学的接近について  
 ——「性愛の界 (sexual fields)」理論における異性愛問題の処遇を通じて——

Adam Isaiah Green ed., *Sexual Fields : Toward a Sociology of Collective Sexual Life*  
 (2014, The University of Chicago Press)

江見 克基

1 はじめに——性愛の「理想」と「現実」

現代社会では、性愛というものについて二つの異なった見方が存在している。一方で、性愛の領域は、たとえば「情熱的な愛」といったイメージとともにロマンティックに彩られている。しかし、他方で、パートナーの選択に際し冷徹で合理的な評価と判断が行われるという実感も我々にはある。このように、性愛という領域において、情動と理性、他者への自己投入と他者の道具的使用という対立する要素が同時に可能になるようにみえるという点では、その特異性を指摘することができる。

前者について、愛情とセクシュアリティが強固に結びついたものとしての性愛の領域は、よく知られているように、婚姻が伝統的な形態から自由恋愛によるものへと推移する過程に伴って「ロマンティック・ラブ」が探求されるようになるという社会変化の過程の所産であり、それゆえに我々に馴染み深いものである。それに対し、後者について一例として、Michel Houellebecq の『闘争領域の拡大 (*Extension du domaine de la lutte*)』における主人公の「僕」の言葉を取り上げることができる。

やはり僕らの社会においてセックスは、金銭とはまったく別の、もうひとつの差異化システムなのだ。そして金銭に劣らず、冷酷な差異化システムとして機能する。……完全に自由な経済システムになると、何割かの人間は大きな富を蓄積し、何割かの人間は失業と貧困から抜け出せない。完全に自由なセックスシステムになると、何割かの人間は変化に富んだ刺激的な性生活を送り、何割かの人間はマスターベーションと孤独だけの生活を送る。経済の自由化とは、すなわち闘争領域が拡大することである。それはあらゆる世代、あらゆる社会階層へと拡大していく。同様に、セックスの自由化とは、すなわちその闘争領域が拡大することである。(Houellebecq 1994=2004 : 111-2)

性愛というものが、闘争によって賭けられ、「勝者」と「負者」が分けられる——こうした世界観は、洋の東西を問わず共有されている。我が国においては、異性との交際できるかできない

いかといった点に関して「モテない」ことが議論されてきた。たとえば評論家の本田透は、恋愛という「自由競争市場」において、「資本主義が貧富の差を拡大し、人間を勝ち組と負け組に二分したのと同様に、恋愛資本主義は恋愛強者と恋愛弱者、恋愛富豪と恋愛貧民、恋愛するものと恋愛できないものとの人間を二分している」（本田 [2005] 2008: 42-3）として、いわゆる「恋愛資本主義」を批判した。さらに、こうした言説に共通しているのは、恋愛やセックスをめぐる残酷な競争において、資本となるものとして第一に挙げられるのが、経済力などの要素ではなく、容姿であるとされている点である（Houellebecq 1994=2004: 59；本田 [2005] 2008: 113）。それは、対人的な魅力にかかわる要素であり、努力を通じては変えられないものであって、「経済的成功」によっても完全には補われないために、こうしたシステムを目前にした個人の諦念を強調したり推奨したりするレトリックとなっている。「モテない」状態について「非モテ」<sup>1)</sup>という言葉が、変えられない属性のように語られる言葉として使われているという指摘があるが（西井 2019: 154）、ここにも理不尽で冷徹な恋愛のシステムのなかで負けることを余儀なくされるという物語を反映されているといえるだろう。

こうしたシステムのリアリティは、非常に通俗的なものに聞こえるかもしれないが、アカデミックな世界においてもときそれと呼応する議論がなされることは、注目に値する。たとえば社会学者の Eva Illouz は、長期的な出会いを求める男女が登録するオンライン上での出会い系サイトの観察から、衝動性（spontaneity）、物理的身体の性的魅力、道具的行為の領域と感情の領域の区分、愛する人物の固有性によって特徴づけられるロマンティック・ラブがとは対照的に、今日のインターネットによる恋愛が、合理的な選択、相手の人格を冷静に判断するテキスト上のやり取り、構造化された市場で自他に帰属される「価値」を重視するという道具性、豊かさの経済と大量消費の原則に基づいた交換可能性によって特徴づけられるとしているのである（Illouz 2007: 2001-14）。

評者の関心は、恋愛関係がパートナー選考において、合理的で自由競争的になっているがゆえに、「勝ち」や「負け」が生じ、ときに不可避的な要因で「負け」ている状態が固定されてしまうという主張を「非モテ」的リアリティと位置づけ、社会学がこれをどのように取り扱うべきかという点にある。そして、こうした問いのもと、Adam Isaiah Green 編著の *Sexual Fields: Toward a Sociology of Collective Sexual Life*（邦題：『恋愛の界——集合的性生活の社会学にむけて』）を取り上げる。本書では、恋愛の領域に、「闘争」のメタファーを頻繁に用いる Pierre Bourdieu の「界」の理論を分析枠組みとして援用する試みが展開されている点で興味深い。さらに、他の著者らによって実際のフィールドに対してこうした枠組みの下で分析がなされており、恋愛の領域を「界」として分析する理論的枠組みをその応用可能性を含めて検討するうえで、適当な題材であると評者は考える。本稿では、まず、セクシュアリティの社会学における本書の位置づけを確認した後、本書の構成を概観し、その上で「恋愛の界（sexual fields）」というアプローチについて Green の説明を要約し、本書の評価を述べる。

1) 一説では、「非モテ」という言葉がネット上で用いられ始めたのは 1990 年代末から 2000 年代初頭とされている（Masao\_hate 2009）。

## 2 本書の紹介

### 2-1. セクシュアリティの社会学における本書の位置づけ

本節では、セクシュアリティの社会学の理論的な変遷をごく簡潔に振り返り、本書における「性愛の界」理論が、「セクシュアル・スクリプト理論」、「社会構築主義」、「クイア理論」との関係においてどのような位置づけにあるのかを示す。

我々はセクシュアリティが自然的な現象であるとまるでそれが当たり前のことであるかのように想定してしまう。このような通俗的なセクシュアリティ理解は、市井の人々の間にとどまらず、比較的最近まで、社会学者達の間にも共有されていた。そこでセクシュアリティは「自然的秩序の一部とみなされ、生物学的性とジェンダーとセクシュアリティは密接に結びつけられ、相対的に変更不可能なものと考えられてきた」(Taylor 2014 : xiii)。これは、精神分析学と生物学のセクシュアリティに関する議論がかつて大きな影響力を有していたためである(Wiederman 2015 : 10)。

これに対し、1960年代後半から1970年代にかけて社会構築主義やシンボリック相互作用論を基盤とし、さらにフェミニズム運動を社会的背景としながら形成された「セクシュアル・スクリプト理論 (sexual script theory)」はセクシュアリティを脱自然化する試みであった(Wiederman 2015 : 11)。そこでは、性愛的行動が社会集団に個人が参入する際に学ばれる「スクリプト」は個人の心理的表象であり、自己や他者の行動を含む経験の理解のために用いられるものと概念化される(Wiederman 2015 : 7)。セクシュアル・スクリプト理論が次第に社会学者に受容され、社会構築主義的な視点はセクシュアリティの社会学において標準的となる。しかしながら、Verta Taylor は1980年代に一般的になったセクシュアリティに関する社会構築主義的観点が、その系譜からして売春、ポルノグラフィ、同性愛など「逸脱」的なセクシュアリティの関心へと志向していたためにセクシュアリティの多様性が考慮されなかった点、ならびに性やセクシュアリティが結局は個人の特性 (properties) とみなされたためにセクシュアリティの構造的・制度的基礎を分析することができなかった点を指摘する(Taylor 2014 : xiv)。

Taylor は、セクシュアル・スクリプト理論を筆頭としたセクシュアリティの社会構築主義的理解が「頓挫」した後、1990年代にそれに代替する形で登場したのがクイア理論であるとしている(Taylor 2014 : xiv)。クイア理論は、異性愛/同性愛という二項対立をセクシュアリティの近代的なレジームと見なし、それへの対抗を強調した。この意味で、クイア理論は、セクシュアリティを制度の側から理解する道を切り開いた。とはいったものの、Taylor 曰く、クイア理論はその出自を文学研究に持っている影響から、文化分析に偏向し、社会学の文脈からは切り離されてしまったという(Taylor 2014 : xv)。

Green による「性愛の界」理論は、以上を背景として、それぞれの強みを継承しながらも、それらの問題を克服する形で登場したとみなすことができる。具体的には、(のちに詳細に述べるように)「界」という観点は、セクシュアリティを脱自然化する社会構築主義の文脈と調

和するものであるが、「性愛の界」理論は「逸脱」というレンズをその視点から取り除き、むしろ性に関する多様なサブカルチャーを分析することで、規範的なセクシュアリティを相対的に捉えている<sup>2)</sup>。この意味では、「性愛の界」理論は、クイア理論の関心を引き継ぐものであるが、あくまでも社会学的な手法、すなわち構造や制度との関係性を問うのである。さらに構造や制度との関係性に関して言えば、セクシュアル・スクリプト理論からみた「性愛の界」理論の特徴が浮き彫りになる。すなわち、「性愛の界」理論は、(セクシュアル・スクリプト理論がそうしたように) 分析の主眼を個人のスクリプトに置いてしまうことで、結果としてセクシュアリティを個人の特性とみなすのではなく、性愛の界という「構造」がいかにして個人の性的欲望、行動、アイデンティティと関係するかという次元を分析の出発点とする。この意味で「性愛の界」理論におけるハビトゥスの概念は Anthony Paik のいうように、スクリプトの概念に対抗するものとなるのである (Paik, 2014 181)。

## 2-2 理論編

以下に本書の構成を理論的な考察を中心とする章と分析に力点を置く章に分けてそれぞれの概要を示す。なお、後者については次節で取り扱う。

序章「集会的性愛生活の社会学に向けて (Toward a Sociology of Collective Sexual Life)」および第1章「性愛の界の分析枠組み (The Sexual Fields Framework)」において、本書の編著者である Green は、まず「集会的性愛生活 (collective sexual life)」が現代の社会生活の一領域として登場した歴史的な脈を概説したうえで、それを Bourdieu の理論における「界」として分析する枠組みを示す。そのために「性愛の界 (sexual fields)」、「欲望の構造 (structure of desire)」、「エロティック・ハビトゥス (erotic habitus)」、「セクシャル・キャピタル (sexual capital)」がそれぞれ概念化される。

Green は、Bourdieu の「界」概念を「社会的に構造化されたアリーナであり、そこにいるエージェント、制度的実践、支配的論理あるいは規制原理によって構成されている」(Green 2014 a : 12) と理解する。そして、「個々の界を特徴づけるのは、弁別可能な一連の行為者、内的論理、制度化された相互行為と自己マネジメントのモード、そして、ある行為者たちにアドバンテージを与え、他の行為者たちにはディスアドバンテージを与える社会的空間の配置である」(Green 2014 a : 2)。後述するように Green は、性愛的な社会生活の領域も同様の構造をもつことに注目し、「性愛の界」としてこれを概念化する。そして、性愛の界への参入する行為者は、「社会的威信や重要性、自己についての感覚、望ましい他者と関係をもつことのできる機会を含む、その行為者の社会空間上の位置を条件づけられることになる重力 (gravitational pull)」(Green 2014 a : 6) へと巻き込まれることになる。

性愛の界は、個別の物理的および仮想的な場に特有のものであるが、Green はそれぞれの性愛の界がもつ特徴を記述するにあたって、界の内部の「分化 (differentiation)」のあり方に注

2) 原文において「性愛の界」が sexual fields と複数形であらわされるのはこのためである。

目する。そこで提示されるのが「水平的分化 (horizontal differentiation)」と「垂直的分化 (vertical differentiation)」である。後者について Green は特に議論を展開し、セクシャル・キャピタルの配分による「望ましきの階層 (tiers of desirability)」という視点を提示する。しかし、Green によればセクシャル・キャピタルは個人的な資質として存在するのではなく、性愛の界の参加者たちの間で「望ましい」とみなされることによって実在性を獲得するものである(したがって、ある場で高いセクシャル・キャピタルをもつ者は必ずしも他の場で高いセクシャル・キャピタルを有するわけでないばかりか、より低くなる可能性すらある)<sup>3)</sup>。

このように、それぞれの性愛の界が有している望ましきの基準とセクシャル・キャピタルの配分のことを Green は「欲望の構造」と名付ける。そしてこの欲望の構造こそが、「界の効果 (field effect)」であり、性愛の界という集合性と、誰に性愛的魅力を感じるかという個人のエロティック・ハビトゥスを媒介するものなのである。

ちなみに、Green はセクシュアリティの社会学に「界」概念を導入する着想を得たきっかけとして自身の二つの興味深い経験を取り挙げているので、以下に補足的に取り上げたい。第一に、ニューヨークの Chelsea から West Village にかけて存在するゲイ・バーの密集地域を Green が訪れた際、彼は周囲の男性たちと自分との性愛的な魅力における格差を意識するようになったという。その境界は、身体や振舞いの適切さによって階層化されており、バーやクラブの客たちがこうした階層の存在を強く意識しながら自分の地位が落ちぶれないように必死になっていたという (Green 2014 a: 2-3)。つまり、そこで彼はある場における「性的階層化 (sexual stratification)」のシステムの様態と、個人の欲望のあり方がそうしたシステムに巻き込まれるということを実感したのであった。第二に、彼の両親は、いわゆる「熟年離婚」を経験しているのだが、その際、体重が増え、若々しくもない父が容易に新しい(しかも若い女性の) パートナーを見つけることができた一方で、経済的に独立し、外見にも気をつけていた母はパートナーを見つけるのに難儀するという状況に彼は遭遇した。こうした差が生まれる背景としてマッチング・システム (dating system) が中高年の女性に対して与えるペナルティがあるのではないかと彼は考えた。この経験は彼にとって、パートナー市場の構造的条件が性的志向や年齢、ジェンダーによって多様でありうるという可能性を示唆するものであった (Green 2014 a: 4)。

さて、続く Matt George による第4章「独自領域としての性愛の拒絶——ブルデューの著作における性愛の界の位置づけ (Rejecting the Specifically Sexual: Locating the Sexual Field in the Work of Pierre Bourdieu)」は、理論・学説史的方法を用いてブルデューが、そのキャリアの初期から性愛に関心を抱いていたにもかかわらず、なぜ性愛の界を独自なものとして概念化しなかったのかを問う。そこで、George は「リビドー」の存在を前提とする性科学や精神医学への批判的態度や、とりわけフーコーとの思想的対立から、ブルデューが性愛の界を独立した

3) この意味で「セクシュアル・キャピタル」は、性愛における魅力資本を個人的な資質に還元して理解した Cathrine Hakim の「エロティック・キャピタル (erotic capital)」(Hakim [2011] 2012=2012) とは異なるものであることを Green は強調する。

領域として構築する可能性を放棄したと結論付ける。ここで行われているのは、ブルデュー自身を当時の専門家集団という「界」の参加者の一人と位置付ける再帰的な考察である。

John Levi Martin による第7章「界理論研究にとっての要点としての性的判断 (The Crucial Place of Sexual Judgement for Field Theoretic Inquiries)」では、界理論の発展においては、魅力の判断を成立させる条件を追求する「魅力の現象学 (phenomenology of attraction)」に定位することが重要であり、そのためになるべく界に外在的な要素を廃した「界の効果」を見定めることのできる「人気の争奪戦 (popularity tournament)」を分析枠組みの中心に据えることが提案されている。具体的には、婚姻と無関係な同性愛を対象とすることが効果的であり、参与観察を含む様々な手法を用いてそれを観測することが性愛の界研究の将来の指針として示されている。

### 2-3 応用編

Martin S. Weinberg と Colin J. Williams による第2章「トランスジェンダー・バーにおける性愛の界、エロティック・ハビトゥス、身体化 (Sexual Field, Erotic Habitus, and Embodiment at a Transgender Bar)」では、サンフランシスコのトランスジェンダー・バーのエスノグラフィーを用いて、欲望の構造とエロティック・ハビトゥスの関係を明らかにすることが試みられている。トランスジェンダー・バーとは、トランス女性とそれに性的魅力を感じる男性が集まり、カジュアルな性的な交際のために主に金銭的な交換が行われる場である。性愛の界の構造としては、トランス女性については主流の女性らしさを基準として階層化されており、自身のセクシュアル・キャピタルと経済資本を交換することが可能となっている。ここで Weinberg と Williams が注目するのは、男性たちが、異性愛者を自認するにせよ、同性愛者を自認するにせよ、性愛の界の欲望の構造に応じて、トランス女性に魅力を感じるようになるという点だ。このように、性愛の対象についての望ましさの範囲が変化することで、男性たちはトランス女性の生物学的性を乗り越えているのである。この過程を説明する概念として Weinberg と Williams は「身体化」を用いる。男性客へのインタビューを通じて、男性が自分の身体をトランス女性の性愛的欲望の客体であるとみなすようになる過程（「客体化された身体化 (objectified embodiment)」）、トランス女性の外見や振る舞いにたいするエロティックな反応を獲得する過程（「知覚的な身体化 (sensory embodiment)」）、トランス女性との性行為の体験を通じて、トランス女性の男性器に困惑するかあるいは逆に積極的にそれに興奮を覚えるようになるといった、自身の身体の反応を自覚する過程（「五感的な身体化 (sensate embodiment)」）という三段階の身体化であり、それらがトランスジェンダー・バーという空間とトランス女性たちの女性らしい振る舞いや装束によって可能になっていることが明らかにされる。

Peter Hennen による第3章「性愛の界の理論——いくつかの理論的問題と実証における困難 (Sexual Field Theory: Some Theoretical Questions and Empirical Complications)」では、「界の形成 (field formation)」の問題、すなわち性愛の界の経年的な発展と変化を、ゲイ文化における「レザーマン (leathermen)」と「クマ系” コミュニティ (bear community)」の歴史的研究とエ

スノグラフィーを用いて明らかにすることを試みる。Hennen によれば、ゲイにおけるレザー文化は、米国において第二次世界大戦に従事し、トラウマに苦しむ退役軍人たちが癒しと仲間を求めて形成された。そしてこの経験を反映しているのが彼らの嗜虐的性向である BDSM (bondage, discipline, and sadomasochism) だ。他方、こうしたストイックなレザー文化を拒否し、温厚で民主的な文化を形成したのが1980年代後半の“クマ系”コミュニティであったという。こうした例から Hennen は、性愛の界は参加者の欲望を全く無から作り出すというわけではなく、経験を共有する人々によって形成され、すでに抱えている性愛的欲望をそこで開放し、そうした場でその欲望をさらに促進させていくという側面を強調する。つまり、これはある種の運動によって性愛の界は、望ましきの基準とともに、新たに形成される、という主張である。さらに Hennen は、“クマ系”コミュニティを例証として、そのように形成された性愛の界が必ずしも魅力によるヒエラルヒーを生み出すものではないと指摘し、性愛の界の分化が必ずしも階層的なものではなく、その理解のためにはより複合的な視点が必要であると主張する。

Barry D. Adam と Green による第5章「界限と性愛の界の社会的編成 (Circuits and the Social Organization of Sexual Fields)」では、性愛の界において、物理的ないし仮想的な空間にいる行為者どうしが相互に顔見知りになることで生じる共同性としての「界限 (circuit)」が個々の性愛の界の性格を決め、セクシャル・キャピタルを評価する際の準拠集団となることに注目する。そして、トロントのゲイ・ヴィレッジの計量的調査を行い、そこでのゲイ達の性愛の界の社会空間的な次元として「性愛の区域 (sexual district)」を描写することを試みる。その結果、界限は特定のメンバーが特定の区域に集合することで構成されており、各界限の参加者の他の界限との重複度や界限の参加者の人種やエスニシティの差異があることが明らかとなった。

James Farrer と Sonja Dale による第6章「上海におけるセックスレス——トランスナショナルな性愛の界とジェンダー化された移動戦略 (Sexless in Shanghai: Gendered Mobility Strategies in a Transnational Sexual Field)」では、上海における異性愛の界においてジェンダーと人種がどのように組み込まれているのかを、上海に暮らす西洋人女性のインタビューとオンラインフォーラム上の投稿の分析を通じて明らかにすることを試みる。Farrer と Dale によれば、上海において西洋人男性は中国人女性にとって高いセクシュアル・キャピタルを有しているのに対し、西洋人女性は (そのグローバルな美の規準との適合性や経済的地位の上昇とは裏腹に) 異性愛の界では周縁に押しやられている。このように西洋人女性のセクシャル・キャピタルが地理的移動に伴い変動することを「セクシャル・モビリティ (sexual mobility)」と概念化し、セクシャル・キャピタルが個人の性質によるものでも、人種的な地位によって一方的な与えられるものでもなく、特定の性愛の界の欲望の構造によって規定されているということが再確認されるのである。さらに、Farrer と Dale は、周縁化された西洋人女性にとりうる戦略として「忍従 (resignation)」、「抵抗 (resistance)」、「地理的移動 (geographic mobility)」、「ジェンダー流動性 (gender fluidity)」、「人種の適応 (racial adaptability)」を挙げる。とりわけジェン

ダー流動性にかんして、西洋人女性は性的に奔放になり、中国人男性にたいしてもより積極的な性的なアプローチを試みるようになるといったような「男性化」が生じることを Farrer と Dale は観察している。このように本章において、性愛の界とエロティック・ハビトゥスの概念は、セクシュアル・モビリティの観点から拡張されているのだ。

### 3 本書の分析枠組み

#### 3-1 「集合的性愛生活 (collective sexual life)」の歴史的コンテキスト

次に本書が構築する分析枠組みである「性愛の界」のアプローチを概観する。Green は今日の性愛のあり方を「集合的性愛生活 (collective sexual life)」と呼び、次のように述べる。

今日、ひとたび一夫一婦制カップルの寝室の外に出れば、さまざまなエロティックな世界の領野が広がっている。それぞれのエロティックな世界は親密なパートナーシップと性的快楽の追求によって組織されており、そのうえそれぞれが独自の制度的そしてサブカルチャー的特徴を有している。こうしたエロティックな世界が、“ハッテン場”でのセックスの相手から将来の結婚相手にいたるまで、個人をパートナーシップの追求へと動員する限りで、集合的性愛生活とみなしうるものを構成している。集合的性愛生活は、友人関係や家族のネットワーク、バー、喫茶店、ナイトクラブ、学生寮、フィットネス・センター、カップリング・パーティー、有料ハッテン場、スワッピング・リゾート、プライベートパーティー、サイバー空間のオンラインの世界やその他諸々に根を張って、そうでなければ拡散してしまう全人口の性的欲望を相互行為と意味構築の特定のアリーナにおいて組織する物理的仮想的場という形態をとる。(Green 2014 a : 5)

Green は、このような集合的性愛生活が可能となった背景に後期近代とセクシュアリティのマクロな変化を挙げており、Anthony Giddens (1992) を引きながら、結婚を前提としたセックスから離れて、パートナーシップの追求が可能となったことで、伝統的制度的な支配から解放され、個人の選択肢が増大し、他の領域から半ば独立したさまざまなエロティックな世界が形成されたと述べる。こうした過程の結果、具体的にはゲイ・コミュニティや“ナンパ”、スワッピングなどの性的探求、(男性に際しては勃起不全治療によって開かれる)離婚や死別後の性愛生活などが登場した。さらに Green が重点を置くのは、近年のコミュニケーション技術の発達である。それは、「多様化し拡大する潜在的パートナーと性愛の場面の社会的物理的地勢の広がりへのアクセスの自覚とその容易さ」(Green 2014 a : 9) をもたらすのである。

#### 3-2 「集合的性愛生活 (collective sexual life)」の集合性

それでは、集合的性愛生活はいかなる意味で「集合的」であるといえるのだろうか。たとえばバーなどは、パートナーシップの追求という関心を共有し参加者が集合する場となりうる



が、そのようにして個人が動員される際に次のことが生じると Green は述べる。

行為者を社会空間に動員するというまさにそのプロセスが、欲望にたいして独立した効果をもち、その効果は性愛における好き嫌い、パートナーの選考、そして性愛的実践を変容させるほどなのである。換言すれば、我々がセックスとパートナーシップを得るエロティックな世界は親密な生活の可能性の条件を確立するものだが、同時に我々が欲しいと思ひ、欲望するようになるまさにそうしたものを社会化するのである。(Green 2014 b : 25)

つまり、Green は人が集まるというその時点で発生する効果にこそ注目すべきであると主張しており、その効果によって我々の欲望は変容するというのだ。その意味で、集合的性愛生活は「一連の行為者個人がもとから持っている性愛的欲望と態度の加法的産物」(Green 2014 b : 43) でもなければ、集合的性愛生活の場の外部にあるより広い社会的コンテクストに還元できるものでもないのである。この点に注目することでセクシュアリティに関する社会科学は次のような指針と可能性が与えられることとなるのだ。

個人が感じる魅力は、社会学者にとって厄介な問題だ。それは予測するのが難しいと同時にほとんど無限のバリエーションのもとにあるからだ。しかし、集合的生活という次元では、魅力の属性は無作為に配分されているわけではなく、むしろ特定の人びとの欲望と態度を反映しかつ生産する体系性を明らかにしてくれる。(Green 2014 b : 25)

個人にも社会にも還元できない「人びとの欲望と態度を反映しかつ生産する体系性」(Green 2014 b : 25) を明らかにするためには、集合的性愛生活が生じる個々の場とむすびついたエロティックな世界に内在的な論理を明らかにする必要がある。ここで分析枠組みとして提案されるのがブルデュエの「界」理論である。次に、集合的性愛生活への「界」理論の応用が本書でどのように行われているのかを概観する。

### 3-3 「界」理論の応用

#### 3-3-1 「性愛の界 (sexual fields)」

前節までで触れてきたとおり、集合的性愛生活は、外部にあるより広い社会構造から解放される形で、さらにそれらから自律性を得ながら前景化してきた。それゆえに、Bourdieu が界理論を用いて分析する対象とは次のように異なっていると Green は述べる。

性愛の界は、政治の界、経済の界あるいは文化的生産の界とは異なる系譜にある界である。これは、部分的には、伝統的な界の資源としての文化・経済・社会関係資本が性愛の界において必ずしも最も重要な権力資源ではないからであるが、そればかりでなく、あるいはより重要なこととしては、政治の界やエリートの文化的生産の界にみられるような、

資格授与と審査を通じた象徴的権力付与の形式的構造といったものを性愛の界がもたないからである。(Green 2014 a : 4-5)

しかしながら本書で Green が界理論を応用し「性愛の界」という分析枠組を構築する理由は、多くの集合的性愛生活が展開される場合は、Bourdieu のいうところの「身を置いた行為者、制度化された実践、そして包括的なロジックあるいは規定的な原理によって構成された社会的に構築されたアリーナ」(Green 2014 a : 12) であり、「界」として分析できるからである。この意味での性愛の界も他の界と同様に「それぞれが他との関係そして界に特有の資源、すなわち Bourdieu のいうところの資本との関係のなかで存在しているような社会空間における弁別可能なさまざまな位置によって構成されている」(Green 2014 a : 12) ののである。このとき、性愛の界において行為者の位置づけの多様性は、「望ましさ (desirability)」あるいは「魅力 (attractiveness)」によって規定されることとなる。Green はこれを次のように言う。

性愛の界が生じるのは、恋愛あるいは性愛的な潜在的関心をもつ一部の行為者が、集合的關係性に内在する望ましさの論理に従ってお互いに関心を向ける時なのだ。そして、この論理は、程度の差はあれ、序列化のシステムを生み出すのである。(Green 2014 b : 27)

さらに、ここでいう望ましさの論理が前節で触れた集合性によって生じる「界の効果」であり、諸個人の性愛的欲望を反映しながら、個人的な欲望を構成する「欲望の構造」である。

### 3-3-2 「欲望の構造 (structure of desire)」

Bourdieu の界理論の定式では、ハビトゥスという内在的な認識構造と、界という外在的な編成すなわち資本が不平等に配分された関係を結びつけて理解することが目指されたわけであるが (Green 2014 a : 13-4)、「性愛の界」理論では、ハビトゥスを「エロティック・ハビトゥス」と名付け、「ある行為者の親密生活を通じた固有の指針を形成し条件づける個人レベルの潜在意識の性向」(Green 2014 b : 36) と定義し、これと性愛の界を媒介するものとして欲望の構造を位置づける。これによって、個人が誰のどんな属性に魅力を感じるかといった望ましさの問題は、個人の欲望でも界内部の諸個人の欲望の単なる集積でもない「界の効果」として分析可能になるのである (Green 2014 a : 14)。

### 3-3-3 「セクシャル・キャピタル (sexual capital)」

性愛の界は望ましさの論理によって序列化されているが、そうした「性愛の界」理論は、こうした序列が生じる理由を「セクシャル・キャピタル」が「平等に配分されておらず、参加者の性質に結びつけられており、行為者はそれに応じて階層づけられ、経験と行為戦略を練ることになる」(Green 2014 a : 15) からであると説明する。しかし、望ましさの論理が欲望の構造によって規定されている限り、「セクシャル・キャピタルは界の性質であると同時に個人の性質でもあり、いずれにも還元することができない」(Green 2014 b : 49)。そのため、セクシャ

ル・キャピタルは行為者が場を移し、特定の性愛の界から離脱すれば変化しうるのである。この意味で「セクシャル・キャピタルは行為者個人に身体化された資源であると同時に界自体の特性でもある」（Green 2014 a: 16）のだ。

### 3-4 「界の効果（field effect）」

Green は性愛の界における集合性が欲望の構造を形成する過程を、界の二つメタファーから把握しようとする。一つ目は「闘争としての界」であり、二つ目は「動員力としての界」である（Green 2014 a: 14）。前者の「闘争としての界」のメタファーに該当するのが「人気の争奪戦」という過程だ。これは、望ましさに関して決められた基準があると考えずに、ある行為者による魅力の評価が他者の評価によって影響を受けるという側面に注目するものである。そして、ある行為者が誰かを魅力的であると判断するのは、他の行為者がそのように判断するからであり、行為者はそうした判断を観察しているのである。ここでは「はじめに望ましいとみなされたものがますます望ましさを獲得し、逆により望ましくないとみなされたものはさらにそのようにみなされる」（Green 2014 b: 38-9）という事態が生じやすい。この意味で、「欲望の構造は、界の参加者の欲望の集積と、他者が何を欲望しているかについて参加者が信じるところのもの両方を意味する」（Green 2014 a: 15）し、またセクシャル・キャピタルについても「個人の地位についての他者たちの評価は、他の人々はその個人についてどう思っているかについての彼らの考えに影響されているということのみをもってしても、セクシャル・キャピタルは基本的に性愛的社会的構造における個人の位置と関連付けられている」（Green 2014 b: 48）といえるのである。

後者の「動員力としての界」のメタファーに該当するのは、一つには、界に固有の欲望の構造が参入した参加者によって学習されるという「性愛の社会化（sexual socialization）」という過程、もう一つには、サブカルチャー的な場の作用としての「集合・増幅・高度化（aggregation, amplification, and intensification）」という過程である。

## 4 本書の評価——性愛の界の多様性と異性愛の一元性

次に、本書の評価を行う。ここでは、評者の関心に即し、性愛の領域のリアリティが「闘争」の様態を帯びる傾向や、そうしたリアリティについての言説に関して、本書が有効な分析枠組みであるかどうかを基準に評価を行う。

すでにみたように、Green は「縦の差異化」や「人気の争奪戦」という概念を、性愛の界の作用のプロセスの中に位置づけている。そして、特に第5章では、望ましさを身体化することができない状況にある人が「拒絶されたり見放されたりする感覚」を抱き、身体への執着や摂食障害、社会的孤立、鬱状態へと導かれる場合があることを指摘している（Adam and Green 2014: 142）。こうした記述は、先に述べた Green 自身のゲイ・バーでの経験も反映されているのだろう。このような点では、「性愛の界」理論は、いわゆる「非モテ」的リアリティに対し、

そうした現象の相互行為論的な基礎を分析するのに適しているように思われる。

しかしながら、「性愛の界」理論に特徴的なのは、こうした「闘争」的状況を認めるものの、あくまでもそれが特定の「界」に結びついた現象であって、そうした具体的な文脈から離れて一般的な法則を立てることはできないとしている点である。たとえば第3章では同性愛男性における“クマ系”コミュニティの分析から、序列化を必ずしも伴わない性愛の界があることが主張されているし、第6章では上海における西洋人女性のセクシャル・キャピタルが本国にいるときよりも低くなるという「セクシャル・モビリティ」の事例から、界には固有の欲望の構造があり、それがセクシャル・キャピタルの多寡を決定することが裏付けられている。

界には界ごとの論理があり、ある場ではたくさんの他者から言い寄られ、それゆえに高い自尊心を有している人も他の場では相手にされないかもしれないし、その逆もありうる。さらに、もっと民主的で友愛的な性愛のコミュニティもある——このような示唆は、「モテない」ことに悩む人にとって一時的な「慰め」や「救い」にはなるかもしれない。だとしてもそうした慰めは、行きつけのクラブやバーを変えることで自分の魅力の位置づけも変えることのできてしまうような、多数の性愛の界を自由に往来できる人々に限られるのではないだろうか。そこで、取り残されるのは、こうした自由な往来ができず、一元的な評価のシステムに身を置かざるをえない人ではないだろうか。そして、たとえば「性的行動はひとつの社会階級システムである」(Houellebecq 1994=2004: 104) といった表現に反映された世界観は、一元的な性愛の界の闘争の中に不可避的に参加させられているという感覚であるとすれば、「非モテ」の悩みを語る人々は、(少なくとも自覚の上では) そうした自由を持たない人々であるのだろう。このような点で、評者は、「モテないこと」や「非モテ」の悩みに接近する手法として、「性愛の界」理論は適合性に欠けると考える。評者は、このような問題が具体的にどのような点から生じているのかを以下に述べる。

それは第一に、(これまでとくに断りをいれなかったが) Houellebecq にしても本田透にしても「モテないこと」や「非モテ」のリアリティは、異性愛が前提とされており、その異性愛という要素が「性愛の界」理論がもつ、次のような前提のために見落とされてしまっている点である。その前提とは、Green は、現代社会における集合的性愛生活の歴史的コンテクストを論ずる際に、Giddens を引きながら制度的な支配からの解放と選択性の高まりに言及することで、サブカルチャー的な場にそれぞれの独自の性愛の界が形成されたと見なしている点である。このために、異性愛は、「性愛の界」理論では見落とされてしまう。というのも異性愛は依然として制度や規範と結びつけられているため、自他の魅力の判断に際して、サブカルチャー的な場の論理の重要性がどこまで有効か疑問が残るからだ。たとえば、須永史生が伝えるように、「ハゲ」であると悩む男性は、具体的な女性の目ばかりでなく、「フィクションとしての女性の目」をも意識しているという(須永 1999: 139)。ここでは、メディア化され広範に浸透した一般的な他者(不特定多数の異性)の評価やその内在化がより強く影響するのではないかと考えられるし、そうした評価は、サブカルチャー的な場の論理よりも多様性に欠くと考えられるだろう。事実、本書において分析が行われるのは、トランスジェンダー・バーやゲイ・

コミュニティといった場であり、(第7章を除いて) 異性愛について正面から深く考察はされていない。Rebecca Plante (2015) と David Evans (2015) も同様の点を指摘しているが、彼らがヘテロセクシャリティの考察の欠如を将来的な課題や発展の可能性として位置付けている一方で、評者はこの欠如が「性愛の界」理論に内在的なものであると考える。

第二に、主観性と客観性という点において、特定の具体的な場の作用が過剰に適用されていることによって生じている問題がある。Green は、欲望の構造が制度化された公的な地位の指標がないため、望ましさの定義(および、それに基づいた地位序列と自己の位置づけ)には観察と推測に基づいた主観的なプロセスが関わってくると述べている (Green 2014 b : 44)。この意味で、欲望の構造は、たとえば実際に“誰が誰とセックスしたいか”という個別の欲望の集合であるばかりでなく、“みんなが誰とセックスしたいと思っているのか”ということについての考えが共有されるような、欲望についての観念の集合でもあり、客観的要素と主観的要素を同時に有しているのである (Green 2014 b : 44)。そのため、自己や他者の魅力のヒエラルヒー上の位置づけは、自分と周囲とで食い違うという可能性、言い換えれば過大評価や過小評価が生じる可能性がある。そこで、Green は、性愛の場との接触の過程で、自他の「客観」的な評価を獲得していく過程があるとし (Green 2014 b : 44)、さらに第5章において具体的な事例からそうした過程にはパターン化された相互行為の学習があることを示している (Adam and Green 2014 : 131-5)。ところで先ほど評者は、異性愛における魅力の判断は、それが制度や規範に結びついているだけに、メディア化された一元的な「フィクション」としての評価に依拠されやすいと述べた。裏を返せば、これは異性愛の男女が魅力評価についての主観的な要素と客観的な要素をすり合わせる際には、Green の述べる相互行為的な基礎だけでは説明することができないということを意味する。それは、ある界における相互行為によって他者が行う魅力評価を学習し内面化した結果というよりは、そうした基礎を欠いた主観的なストーリーと見なす方が妥当であるだろう。そのため、本稿第一節で触れたように、「非モテ」的リアリティやその言説において、「諦め」が語られるのは、具体的な他者の評価というよりも、たとえば「[[女の基準]に合格できる男とは……イケメンか、あるいは、金持ちなのだ!」(本田 2005 [2008] : 35) と、あたかもそうした極端な評価基準が「一般的」であるかのようなレトリックを通じてなのである。このようなメディア化された抽象化された魅力判断を無理やりに「界の効果」として分析しようと試みれば、「性愛の界」概念は拡散して意味をなさなくなってしまうだろう。

以上をまとめると、次のようになる。すなわち、性愛の領域を、異性愛に限定してみたとき、それは制度や規範と結びついているため、Green が前提としたほど、サブカルチャー的な場の様態をもっておらず、魅力判断は具体的な場における他者との相互行為を通じて形成されるというよりは、メディア化された一般的な言説により多く影響を受けるのではないか。そして、このとき、具体的な相互行為によって魅力判断の主観的側面と客観的側面が調停されるような「性愛の界」のあり方を分析する Green の理論は適合性に欠けるということになる。

## 5 おわりに

本稿では、本書の全体像からその中心的な分析枠組みを概観したうえで、本書を「非モテ」的なリアリティを扱うための概念的な道具立てを用意している点で魅力的であると評価した一方で、広範に規範と制度と結びつけられた異性愛を分析するには、あまりにも具体的で個別的な「界」の効果を重視しすぎていると指摘した。ここから、異性愛における「非モテ」というリアリティに社会学が接近するためには、「闘争領域」として恋愛やセックスを捉えようとして、「勝者」や「敗者」を生み出す「界」のメカニズムを（Houellebecqの小説の「僕」や本田がそうしたように）解明しようと試みるよりも、「闘争領域としてのセックス」や「恋愛資本主義」や「非モテ」的リアリティをリアルなものとしてあるかのように語らせるような異性愛に関する言語編成そのものを分析する方が、社会的には意味のある作業であると評者は考える。

## 【参考文献】

- Adam, Barry D. and Adam Isaiah Green, 2014, "Circuits and the Social Organization of Sexual Fields," Adam Isaiah Green ed., *Sexual Fields: Toward a Sociology of Collective Sexual Life*, Chicago and London: The University of Chicago Press, 123-142.
- Evans, David, 2015, "Sexual Fields: Towards a Sociology of Collective Life," *Culture, Health & Sexuality*, 17 (8): 1057-1058.
- Giddens, Anthony, 1992, *The Transformation of Intimacy: Sexuality, Love and Eroticism in Modern Societies*, Cambridge: Polity Press. (松尾精文・松川昭子訳, 1995, 『親密性の変容——近代社会におけるセクシュアリティ、愛情、エロティシズム』而立書房.)
- Green, Adam Isaiah, 2014 a, "Toward a Sociology of Collective Sexual Life," Adam Isaiah Green ed., *Sexual Fields: Toward a Sociology of Collective Sexual Life*, Chicago and London: The University of Chicago Press, 1-23.
- Green, Adam Isaiah, 2014 b, "The Sexual Fields Framework," Adam Isaiah Green ed., *Sexual Fields: Toward a Sociology of Collective Sexual Life*, Chicago and London: The University of Chicago Press, 25-56.
- Hakim, Catherine, [2011] 2012, *Honey Money: The Power of Erotic Capital*, London: Penguin (田口美和訳, 2012, 『エロティック・キャピタル——すべてが手に入る自分磨き』共同通信社.)
- 本田透, [2005] 2008, 『電波男』講談社.
- Houellebecq, Michel, 1994, *Extension du domaine de la lutte*, Paris: Éditions Maurice Nadeau. (中村佳子訳, 2004, 『闘争領域の拡大』角川書店.)
- Illouz, Eva, 2007, *Cold Intimacies: The Making of Emotional Capitalism*, Kindle Edition, Cambridge; Malden: Polity Press.
- Masao\_hate, 2009, 「非モテに『歴史』は存在しない。ただ、アーキテクチャに依存するのみ（あるいは、非モテのモテ性について）」『奇刊クリルタイ』クソタイ 4.0 制作委員会, 4: 38-40.
- 西井開, 2019, 「痛みとダークサイドの狭間で——『非モテ』から始まる男性運動」『現代思想』47(2): 154-160.
- Paik, Anthony, 2016, "Sexual Fields: Toward a Sociology of Collective Sexual Life," *Contemporary Sociology*, 45(2): 181-182.

- Plante, Rebecca F., 2015, "Book Review : Sexual Fields : Toward Sociology of Collective Sexual Life edited by Adam Isaiah Green," *Gender & Society*, 30(3) : 550-552.
- 須永史生, 1999, 『ハゲを生きる——外見と男らしさの社会学』 勁草書房.
- Taylor, Verta, 2014, "Preface," Green, Adam Isaiah ed., *Sexual Fields : Toward a Sociology of Collective Sexual Life*, Chicago and London : The University of Chicago Press, xiii-xviii.
- Wiederman, Michael W., 2015, "Sexual Script Theory : Past, Present, and Future," John DeLamater and Rebecca Plante eds., *Handbook of the Sociology of Sexualities*, Cham : Springer, 7-22.